子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1993年7月1日発行　[隔月発行]

文化高知

'93年7月　NO.54

「夏の日」　片木太郎

(財)高知市文化振興事業団

愛と文化と

紫藤　貞美

テレビの連続ドラマで「銭形平次」がまた始まった。まあその筋はどうでもいいのだが、私にはそれと関係した忘れ得ぬ想い出がある。

○

いまの横山高知市長のまえは、坂本昭さんで、なぜか私は十歳も年上の彼からたいへん可愛いがってもらっていた。もちろん彼はそのまえは参議院議員もやった人だし、医学博士という肩書きも持つ。私も医者だからという理由だけでなく、趣味も話題も共通したところが多く、非常に快適なおつきあいだったと思っている。常に前向きの姿勢で政治力も抜群のものがあったが、立志社創立百年記念のときの挨拶といい、またすべての文化行事に必ずといっていいほど顔を出され、とくにクラシック音楽には造詣が深く、音楽会というと打ち合わせもしないのに必ず顔を合わせた。

忙しい政治の世界で過労なことも多く、当時私は愛宕町で開業医をやっていたのだが、彼はときどき帰りの車を私のところへ廻し、夜おそくまで一緒にウイスキーをのみながらレコードを聞いて帰るということもあった。彼が大腸癌で亡くなったとき、私は涙を流しながら、「男を泣かせる男」という追悼文を新聞に書いた記憶がある。

○

その坂本昭さんも、身体の調子が悪くて入院された。当時、私の親友であった高知市民病院の病理検査部長のTから聞いたことだが、念のためにと坂本さんの大腸の粘膜からとった病理検査標本を顕微鏡で調べていたとき、ふっと気がつくと後に坂本さんが病衣を着たまま立っていて、にこにこ笑いながら、

「きみ、ぼくはあとどのくらい保つだろうね」

と聞かれたという。

「あのときぐらいびっくりしたり、感動したことは後にも先にもない」

とTは述懐していた。

○

坂本さんの入院と手術はそれから二回行われて、三回目の入院中のことである。私の次男が結婚することになり、いろいろ考えた末、一応儀礼的に挨拶状を出した。ところが、当然欠礼の返事があるものと期待して（変な言い方だが）いたのに、意外にも、現在小康状態だから是非出席する、という通知がきた。それでもやはり来ることはない、と信じきっていたのに、結婚披露宴が始まって十分ほどすると、大勢の参会者の驚きの声を尻目に、坂本さんが堂々と入って来られたのだ。多少やつれたそれでも独特の坂本スマイルで壇上に立ち、

「遅れて来たので挨拶はおこがましいから、歌を唱います」

と言われ、始まった歌が「銭形平次」だったのだ。

男だったらひとつにかける、かけてもつれたなぞを解く……と涼しいよく透る声が流れて最後に、今日も決め手の銭が飛ぶ、というところでポケットから数枚の十円銅貨を出し、それを会場にバラバラッと撒かれたのだ。会場はワッとどよめいたが、私は離れた席で、ひそかに涙が止まらなかった。

坂本さんが高知記念病院で三度目の手術後、遂に帰らぬ人となったのは、それから二カ月後のことである。

○

最近はカンボジア問題をはじめ、世界中が玩具箱をひっくり返したような騒ぎになっている。日本国内だってご多聞にもれず政治も経済もどうなるのか先がみえない。人々は一様にどうして良いか解らぬといった状態になっているようだが、こんなとき皆が落ち着きと思慮分別をとり戻すよすががどうしても必要である。その良薬が「文化」だと私は思う。いままでの歴史からいっても世界のなかで、国が乱れると文化が栄えるという皮肉が繰り返されてきた。それは、乱世になると人間は初めて愛の枯渇により、その尊さを知るからであろう。

そして私は、人間の愛は文化のなかからこそ生まれて来るのだと、固く信じている一人なのである。

（高知市文化推進協議会会長）

土佐料理私見

牧川　史郎

このごろしきりに、子供のころに食べた、なつかしいふるさとの味にもういちど出合いたいと思うことがある。が、それをさがすのはなかなかむずかしくて、そう易々とそんな材料を手に入れたり、口にしたりすることはできない。苦労の末に、子供のころに馴染んだ食べものにめぐりあったと喜んでみても、いざ口にしてみると、ゲンメツを感じることが多い。そこにはひどく加工の度が加えられていたり素朴さが失われていたりして、自分のさがしていたなつかしい、ふるさとの味とはまるで違う。時代は、食べ物の味まで変えてしまうものらしい。

私の育った土佐を代表する郷土料理といえば、〝皿鉢料理〟に尽きるというのが大方の定見である。あの大皿に、雑多な材料を調理してドンと盛った皿鉢は、まさに土佐の代表料理としての風格が具わっていて、その名に恥じない。豪放磊落な土佐人の気風がそのまま料理にも反映されているようで、郷里の人々の料理に対する考え方の大本をそこに見る思いがする。

豪華さと盛り沢山というだけを引き合いに出すなら、各地の郷土料理のなかでも皿鉢料理は屈指といえるだろう。

何年か前、帰省する折に大阪の友人を誘ったことがある。美食家でいて健啖家の彼は、すぐさま私の誘いに乗った。本場の土佐で鰹のたたきを賞味したいという願望を彼は以前から私に漏らしていたのである。

鰹の走りの季節であった。桂浜に遊び、四万十川の清流を眺め、私たちは心ゆくまで初夏の土佐の風物を味わった。

その夜、郷里の友人の家に招ばれた私たちは、皿鉢料理の馳走にあずかった。生まれも育ちも大阪だという連れの友人は、名にし負う皿鉢の見事さに驚嘆し、そこに箸を付けるのが勿体ないとさえ言った。土佐の地酒に鰹のたたきと、豪華な皿鉢料理の贅を堪能しながら、私は連れの友人に向かって、ガラにもなく土佐料理に関する蘊蓄を傾けたりしたものである。

一体に、土佐料理は大味であると思うがどんなものだろう。何も私は、郷里の味にケチをつけているのではない。子供のころから自分の舌が馴れ親しみ、いわば私の味覚を形成してくれたに違いない土佐の味というものを愛しているからこそ言うのである。が、材料の持ち味を手間隙をかけてじっくりと引き出し、そこに上品で、微妙な味をつくりあげて、至上の味わいを得る、といったふうな料理ではないことだけは確かだ。鰹のたたきにしても、もともと漁師が、釣り上げた鰹を船の上ですばやく調理して食したことに始まり、現在のように藁火で燻すことによってさらに旨味を引き出し、それが美味ゆえに、たたきの本場としてその名が全国に知れわたったのだと仄聞する。このことからしても、調理方法に限って言えば、簡単この上なし、と言えよう。何年もの経験を積んだ板前の腕に頼らなければ生まれない料理というのではなかろう。鰹の鮮度と、燃やす藁の量と、火加減さえ心得ていれば、誰でもたたき名人になれそうだ、と浅はかなことを考えたりする。

素朴で、豪快で、大味で、というのが、私の目と舌を通して感じる土佐料理の実感である。それに、料理に限らず、土佐人には大振りなものへの嗜好が強そうだ。

特産品としてあげられる〝新高梨〟にしても、あれはまるで梨のオバケである。味はといえば、淡白で大味。〝ポンカン〟も郷里の友人などからちょくちょく送っていただきながら申し訳ないことを言うようだが、私はあまり好きではない。その荷物が届くと包装を解くなり、近所へ配る。めずらしい味だと近所の人に喜ばれている。

私がもういちど口にしたいと思う土佐の味といえば、やまもも である。野趣に富み、甘酸っぱくて、ほのかに土の匂いさえ含んでいる。旬の短いこの果実を、私は愛してやまない。

（作家・大阪文学学校講師）

〝キブツ〟留学記 (上)

私のイスラエル

江島　民恵

イスラエルっていうと「ああ、湾岸戦争の…」、「スカッドミサイルが飛んだ…」と多くの人々のイスラエルに対するイメージというのは、暗い戦争がほとんどではないでしょうか。実際、近年にあの悲しい湾岸戦争があったため、日本のマスコミがイスラエルをもっともクローズアップしたのは、このニュースや戦争談話だったからかもしれません。

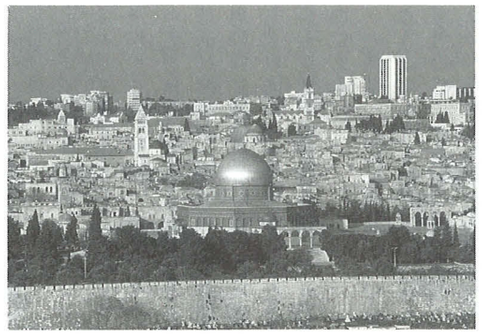
今回、三回連続で私のイスラエル留学の体験を書く機会を与えられて嬉しく思っています。拙い文章で分かりにくいところも多いと思いますが、私が見てきたイスラエル、感じたこと、そして大ざっぱではありますが、ユダヤの歴史に少し触れながら綴っていきたいと思います。

私がイスラエルへ留学したのは、今から六年前の一九八七年の五月です。日本人十五名のグループで出発しました。話は前後しますが、帰国後もよく友人から「どうしてイスラエルなの？」と問われますが、イスラエルへ行きたかった理由は沢山あります。三つに代表すると、一つ目は両親の代からキリスト教で、子どもの頃から聖書を手にしていたこと、二つ目は私の留学する七年前に兄が留学していたこと、三つ目は、これからお話しするキブツ（集団農場）と呼ばれるイスラエルにある共産農業共同体にとても興味を持っていたからなんです。

キブツ（集団農場）って何？

キブツというのは、具体的に説明すると、食堂、洗濯室など共同で、その敷地内に学校もあれば保育園、幼稚園、診療所、文化ホール、小規模の動物園まである日本には類のないコミュニティーなんです。内容は現代の日本社会ではちょっと想像しにくいですが、説明をすれば施設全部が共有財産で、その中で生産されるものも共有です。賃金制はありません。では、どうやって生活しているの、と思われますが、必要なものは全て、キブツ側から与えられます。仕事は適性に合わせて分担して働きます。中には、キブツ外へ働きに行く人もいますが、賃金はキブツに全部入れます。現状の変化によりそういった形態は変わりつつあると思いますが、従来のキブツとは、このように私有財産はありません。洗濯物の例をとるとよくわかると思いますが、キブツ員全員の衣類を洗いアイロンがけして返してくれます。キブツのメンバー全員が一つの大家族なんです。

イスラエルにはこういったキブツが約三十近くあります。それぞれ運営の仕方は、多少異なりますが、形態はほとんど同じです。規模には、大小がありますが、現在イスラエルは、ロシアからの多くの帰還者があったり、湾岸戦争後の多くの変化の中で、キブツも変わりつつあります。



エルサレムの黄金のドーム

では、私が実際キブツでどんな生活を送っていたかをご紹介します。私たちは、先ずウルパンというヘブライ語教室でヘブライ語を学びます。これは、キブツの運営の一端で本来は、各国からの帰還者たちをキブツで受け入れ、ヘブライ語の習得とイスラエルの歴史、風土、民族性等をもり込んだ授業を半年間位のシステムで行います。そして、イスラエルの土地で自立出来るように養成するものなのです。そのウルパンに日本人なのですが組み入れてもらって、若い帰還してきたばかりのユダヤ人たちと席を並べて勉強しました。

教室は、十二畳敷位の小さな部屋で寺小屋式に長机を並べてあります。教室内には、フランス、アメリカ、ロシア、南アメリカからのユダヤ人帰還者たちで、小さなその教室はまるで国際会議でも始まりそうな雰囲気なんです。授業は、日本人には少々にがてなディスカッション形式が主です。上級クラスでは、一つのテーマを掲げて、それについてヘブライ語で自分の意見を述べ合います。まさしく小さな国際社会がそこにありました。

（㈱モックス　細木建築研究所）

ライオン宰相

濱口雄幸の母・繁 (二)

近藤　直彦

旧長岡郡三里村、十市村の背を、土佐湾に平行するように東西に走る浦戸湾戸合の東孕大畑山～十市大森山、百五十メートル級の山並みが香長平野三和村に没し、その端から〝十市のこんぴら様〟で有名な琴平山が太平洋に向けて伸びている。琴平山と大森山が接する鞍部〝茶園越し〟を東北方向に過ぎれば稲生村に出る。茶園越し寄りの、浜の者が〝郷〟と呼ぶ大森山南麓の国政に繁の里西山屋敷があった。

国政は十市村最東北にある集落で、西へ土居谷、人形谷と続いており、人形谷はヤマモモの王様「亀蔵」の原産地である。この地区の産土神社〝女躰様〟はその道筋に座している。

屋敷の前には〝東の沢〟と呼ばれる広々とした田園が展け、南に浜街道の松並木が丸くふくらんだ砂丘に聳えているのが望めた。左手琴平山の海辺寄りに劔尾神社があり、右手西南には、十市細川殿鎮守・新宮神社の森の向こうに四国霊場三十二番札所禅師峰寺が見え、刻を告げる鐘の音がかすかに聴こえる位置である。

十市の里は白装束の姿が絶えることがなかった。

この国政の丘で、ライオン宰相濱口雄幸の母繁は生まれ育ったのである。

厳しさと慈愛を兼ねもった、少年雄幸の養育に励んだ賢母であったと聞いている。山内藩政時代の野中兼山の母・秋田夫人に比して遜色ないのではなかろうか。

そのことを私は評価したい。一国の総理大臣の生母が十市村の出身であるというのは、十市にとって名誉なことである。

しかし残念なことは、雄幸の政治家としての、また濱口家や水口家の記録が多くあるのは当然のことであるが、一方、その雄幸の母「水口繁」または「西山繁」としての存在が忘れ去られている、ということである。

私が知る限り、繁の名はある本にわずか数行の活字となって残っているだけで、私は少々不満である。もう少し世の人びとに繁のことを知ってもらいたい、と思っている。

「女は三界に家なし」とは哀しい昔のことで、総理大臣濱口雄幸を立派に育てた繁を、一人の女性として掘り起こし、陽の目を当てることが出来れば—とささやかな願いをもっている。

唐谷水口家墓所に、繁は夫胤平の墓碑に添って眠っている。

その墓碑に「水口胤平妻繁」とあり、側面には「明治三十八年六月十日没、享年七十二歳」と記されている。「妻繁」の名が刻まれているのが嬉しかった。

浜口雄幸の母・繁の墓（左）

ただ「十市村西山馬七長女」の文字が無いのが、なんとはなしに寂しく思われたのである……。

（完）

（元高知印刷株式会社製作本部長）

鳥の巣工房の言

沖本　桃代

一昨年家を建てた。あり金をはたき借金をして、どうやら希望通りの家ができた。と思って移り住んでみると、少し狭い。仕事部屋がとれない。

もっとも、仕事という程でもないけれど私はときどき『切り紙え色紙展』を開くことを余儀なくされる。というのも、親友K女史に強引にやらされたのが始まりである。

もう、二十年以上も前の某日、やって来た彼女は、「フレズノへのお土産を作りなさい。もう引き受けてきたき、あなたが作らんと私の顔が立たん」という。ポカンとしている私に、「できる、できる、あなたなら大丈夫」とけしかけてさっさと帰っていった。気の弱い私は、思ってもみなかった外国へのお土産を、しかも期限つきで作らざるを得ないはめとなった。

「日本的で美しく、携帯に便利なもの」との注文に、蝶々夫人や八百屋お七など五、六点、色紙に貼絵して彼女に届けて、ほっとした。ところが数日してやって来た彼女は、こんどは「あなた、個展をしなさい。もう会場も予約して来たき」という。

「あの色紙なかなか好評で、希望者多数、『それでは個展の時においで下さい』と案内して来たき、個展をせんと私の顔が立たん。

そうやねえ、『切り紙え』としよう。『沖本桃代・切り紙え色紙展』でいこう」

と、彼女は上気嫌、私は大困惑、かくして笛画廊での個展となったのが始まりである。

以来二十余年、色紙のヒロインは、愛唱歌、万葉集、童謡に演歌と続き、いつの間にか『切り紙え』は、ベッタリと私に貼りついていたのである。そんなわけでいつも私のまわりには、紙や鋏や、絵具やその他モロモロが、ノミの市よろしく足の踏み場もない有様なのだ。

さて、去年の秋、証券会社から書類が来た。なんと、忘れていた金が残っていて、しかも満期が近い。よし、アトリエを作ろう。裏の倉庫に二階を作ってアトリエにしよう。と、早速一月から増築工事なるものが始まった。

ところがこの倉庫、家の北側、三角敷地に建てられていて、必然的に二階も三角、まこと大工泣かせの気の毒な工事となった。けれども棟梁はナポレオンのような、不可能を知らない男で、七畳ほどの変形の部屋が出来上った。「アトリエなら明るうないと」と、三方に広く窓をとり、天井も高くしてくれ、予想よりずっとずっと立派な部屋になり、私は感激して予算外のシャンデリアを奮発することになった。

母屋にくっついてひょろりと高いこの部屋、北の窓ちかぢかと一本杉が聳え、東は遠く水平線が霞む。窓ぎわすれすれに木々の梢がそよぎ、さながら鳥の巣の居心地、アトリエとはおこがましく、『鳥の巣工房』と名付けた。

かくして三カ月、私は悠々と『鳥の巣工房』でコーヒーを沸かし、別れの一本杉を歌い、ラジオを聞き、製作ならぬお昼寝にいそしむ。

絵は一枚も出来ない。

（山賊館・北の砦住人）

バイクと私

堀田昌一郎

中学生の頃、それまでは危険なイメージしかなかったバイクに突然興味がわき始め、いろいろな専門誌を購読することから私とバイクの付き合いが始まりました。が、当時は年齢もたらず、ただただイメージの中での楽しみでした。実際に乗り始めてから今まで十数台を乗り継いではきたのですが（あきっぽいと思われるかもしれないが）、それぞれのバイクにそれぞれの思い出があります。私の場合、バイクとの付き合い方は割に気軽なものでして、移動の手段のスクーターから、山の中を走ったり、ちょっと日帰りでツーリングを楽しむといったことくらいです。グループで走りに行ったり、モータースポーツを本格的にするとかいったようなことでなく、日常の生活の中で楽しむというくらいで、はたして趣味といえるかどうか自分では分かりません。

しかしバイクに乗っている間は、例えスクーターで街を走っている時でも不思議と楽しい時間になります。手前から準備をして、長いツーリングなどでなくても、ただあの不安定な二輪にまたがって移動するだけで楽しむことができるのです。元来、私はじっとしていることがあまり好きでなく、小学生の頃から自転車でよく走りまわっていました。その頃からすでにオートバイが好きになる下地はあったのかもしれません。

中学生になってからは山へよく登るようになり、ほぼ同時期からバイクにも興味を覚えるようになったのです。この山に登ることとバイクに乗ることとは私にとって感覚的に同じものであり、両方とも自然の中に一体になっていくような感じがあるのです。移動の手段の車は（車も私は好きなのですが）自分の体のまわりの空間がそれごと移動し、緊張感があまりなくかえって自分にとって怖いものになってきます。バイクなら体に風をうけ、足元二十センチ下はそのスピードで流れていっているのです。また気を抜くと転倒といったことにもなってしまうのですが、それらを体にダイレクトに感じながらコントロールするところに、面白みがあるのではと思うのです。

また、乗るほかにも、バイク仲間と話したり、好きなバイクを所有したりですが、今、二十年前に出合ったバイクを再生中です。ずっとあこがれていたバイクにようやく乗れる日が来そうで、その日を楽しみにしているこの頃です。

（高知青年会議所）

香りの文学

川村　幸美

香りには、さまざまなものがある。

日頃、あまりにも慣れ親しまれて素通りしている香りを、いま一度、思いおこしてみるのも面白い。

女性をとりこにしてきた香水、化粧品、スパイスなどの調味料、医療、防虫用、そして私たちの大切な先祖の常食とされている線香など、香りとのつき合い方も、さまざまである。

街角で、何気なく入った喫茶店の手洗い場にさりげなく置いてあるポプリ、ハーブ、花型のミニソープなどの香りが今、静かなブームになっている。また車の芳香剤をはじめ、香りグッズが大流行の現状のようである。

或る日、タクシーのなかにお客さんサービスとして伽羅の香袋を置いてある粋な運転手さんに出会ったこともあった。

香りは、人間を不思議な気分にさせる代物のようである。

香道について、友人から「聞香」のお誘いがあった。私にとって、未知の香りとして香席で聞くことのできた香のテーマは、「源氏物語」の「梅枝」の巻であった。この時、私は始めてお香は、聞くだけでなくて、深い文学的なふくらみがあるという体験をした。古典文学の登場人物に合ったお香が選ばれていくという、きめのこまかい感性は、香りを文化として楽しむ日本人の素敵な世界だと、つくづく思った。

無心でお香を聞く瞬間というのは、言葉で表現することは、むつかしい。ただ、何となく、こころのなかの何かが、静かに満ちてくる想いがあったことは確かであったし、それは、官能の陶酔ともいえよう。

「源氏香」ってどんな香りと聞かれても、すぐに「幽幻である」「心にくく静やかな匂い」とか「なまめかしい」などとは言えない。

お香は私にとって、こころのゆらぎをもたらしてくれる香りだと思う。

やはり、こころを澄まして香りと出合うその一瞬に、神経を集中する記憶で遊ぶ香りのゲームだと思う。

お香の分別、聞きわけが出来るためには、やはりお香を聞く勉強ということが先決だし、文学、特に古典文学に興味をもつということが、大切だと思った。

お香は、透明な香りを放ち、消えてなくなるものだけに得がたい貴重な存在である。

（高知文学学校）

私の昭和⑦

升形界隈

織田　桂輔

升形に生まれ育って七十余年、私の幼年期に昭和は始まった。今、幼年時代を思い起こして、当時の街のことなどを書いてみたいと思います。

大正十一年生まれの私が、物心がつきかけた時、現在の織田歯科医院の建築が始まっていました。私の父がかなり思い切った決断をして、当時としては極めて稀な鉄筋コンクリート造りで診療所を新築したことは、今思っても敬服に値することだったと考えられます。確か太平洋戦争の終わった当時、堀詰に残っていて、「夕刊高知日報」の社屋になっていた建物が、高知で一番古いコンクリート造りであったと聞いていますが、その次に建築されたのが、当織田歯科医院であったとのことです。

現在のように機械力で工事をするのと異なり、沢山の日雇さんが木遣節を歌いながら、丸太を組んで作った矢倉に重い錘を引き上げては、ドンと落とすことを繰り返して、基礎になる大きな松の丸太を、打ち込んでいたのだと聞かされました。まだ幼かった私は、子守さんにおんぶされて、毎日その様子を見ていました。夜になると、寝床の上で父の重い枕を帯で結んで「ヨイトマケ」と音頭をとりながら、家中の者と地づき工事の真似をしたことでした。

この診療所の建物を、戦争の大空襲から守り、また昭和二十年代の南海大地震にも事無きを得て現在に至っているのは、当時の建築を施工された福留さんという大工さんの研究熱心と、丁寧な工事によるものと、深く敬意を表するところです。

また私の祖父の織田信福（自由民権運動家で、市会議長や県会議員を務めた）が、養子であった私の父正敏を応援して希望を達成させたことを考えて、今でも感動させられています。この診療所が、私の昭和時代を通じての心の拠り所となり、また昭和十八年に歯科医師となってからは、私の仕事場として、さらに修練の場として、毎日を過ごさせてもらっている次第です。診療所のことは以上にさせていただき、升形の街並みなどを、ふり返って見たいと思います。

昭和の初め頃の道路は、勿論今のように広くありませんでした。電車通りも、今の歩道や自転車道を取り除いた状態よりも、さらに若干狭かったかも知れません。私宅の北側は今のように道路でなく、大きな邸宅や庭園になっていました。また帯屋町は升形に突き当って北へ曲り、今の県庁西庁舎の南側の現在の道路になっているところから円満橋の方に向かっていました。また現在はありませんが、電車通りから今のパチンコ店ホームランの駐車場の東側に、北へ抜ける小路があって、その入口西側に、高知で最初の映画館「出雲館」があり、帯屋町へ抜けるまでの途中に玉突店や料亭があって、確か入口に大きな狸の像が置かれていたことでした。

また電車通りの南側には、今の出雲大社の入口の所に一寸した広場があって電車の待合所がつくられ、参道の東側には交番所がありました。そして水路を隔てて高知で一番大きな紙屋の仁尾商店があり、さらに日新館書店、玉屋洋装店、徳屋果物店、岡江薬店、オリエンタルカフェー食堂と続き、竹村文英堂書店が軒を並べていました。またその東側は、「クッサンタクシー」の営業所が続き、昭和初期の升形は、高知の一つの中心的存在であったようでした。オリエンタルカフェー食堂の店頭のウインドーには、食用蛙も展示されていて、当時としては全く珍しい存在でした。また、途中には後に高知無尽（今の高知銀行）の社長になられた岡内瀞一さんのお宅と、川島金物店の間口の広い店があったことでした。

電車通りの今のグランド前停留所（乗出し）の南側は、本町上一丁目で川崎幾三郎さんのお屋敷、北側に丸亀屋菓子店（プロ野球の岩本選手のお宅）などがあったようでした。そしてキリスト教高知教会、南北の道を隔てて大西正幹さんのお宅などが

あり、角から二軒目位から西へ池上毛糸店、名前は知りませんでしたが、本造三階建の旅館、それから小路を隔てて前出の出雲映画館となっていました。そしていつも香ばしい香りを漂わせていた本田炒豆店、さらに高知一の岡林牛肉店があり、大理石造りの広いカウンターの側面には、達筆の文字が刻まれており、ずっと後に教えてもらったのですが、「四時盛開黒牡丹」が二行になっていました。小畑の散髪屋さん、大川洋服店などが続き、角は「ドラッグストアー」というのがあって、いろいろな病気の様子を示した身体の模型標本を陳列してあり、わけの分からぬままに自由に見せてもらっていました。

そして南北の道路（私の診療所の正門前の道路の入口）を隔てた町角には「湖月そば店」が大きな店構えで盛んに営業中でした。因みにこの湖月の息子さんが、島﨑徳次さんといわれて私の一年先輩であり、先年亡くなられましたが、私の前任の町内会長でした。また三木履物店、三木松月堂菓子店、江村小間物店などが続いていました。

以上のように書き連ねますと、随分と近代的な町であったように感じられますが、やはり昭和初期といえば、現在のようなネオンや明るい電燈ではなく、町はあまり明るくありませんでした。夜は蝙蝠が盛んに飛び交って、竹竿を振り回していれば当たるほどでした。蝙蝠の代わりに通行中のおじさんの頭をぶんなぐって、叱られた子供もいたようです。

明治44年の升形界隈（祖母織田竹の葬儀の日）

このようなのどかな環境の中で育った私は、長男で大変温和な子供であったようです。やがて柳原幼稚園（今の忠霊塔の東側にあった）に通い、第六小学校に上がったのが昭和三年でした。或る日私が自宅に帰って「今日、自動車が物凄う急いで行きよった」と父に報告したことがありました。子供の目には、砂ぼこりを巻き上げて走る車が珍しく映ったものでしょう。それだけ自動車は少ないものでした。また電車のレールの上に小石を置いて、電車が通ると一瞬に小石が粉々になるのを楽しんだものでした。

またその頃の柳原附近は橋がなく、向岸には浅瀬をぞぶって渡り、今のグランドの辺りで遊んだものでした。

このような時代を経て、小学校四年生の時に満州事変が起こり、日本全体が軍国主義の方向に進むことになり、国民は苦しい体験を強いられることになりました。私は近眼が強かったことなどもあり、第三乙種で召集を受けずにすみ、現在に至りました。軍人があまり好きでなく、軍人の横暴な態度には常に反感を持っていた私には幸いでした。

戦争の犠牲になられた方々のご冥福を祈りつつ筆を擱きます。

（歯科医師）

幕末の青春—坂本龍馬の生涯

山本 大 著

四六判・168頁・定価1,200円(税込)

薩長同盟を成立させ、新政府の構想を打ち立て、幕藩体制から時代を大きく転回させた坂本龍馬。激動の幕末期を駆け抜けたその青春像を、高知の歴史学の大家が分かりやすく描いた、子供から大人まで親しめる屈指の龍馬伝。

高知の山と森（八）

足摺の森

西村　武二

四国最南端の足摺岬のイメージはどんなものであろうか。

まばゆい南国の陽光のもと、果てしなく広がる空と海、あくまでも透明で紺碧の海、黒潮が洗う岩礁、そそり立つ断崖、その上の白亜の燈台。そして岬の段丘の椿のトンネル、金剛福寺に参拝するお遍路さんの群れ。まずはこんなところではないだろうか。森のイメージはほとんどないといってよい。

しかし岬の展望台に立ち、山側を眺めると、照葉樹特有のモコモコした樹冠の森が広がり、空海が開基したといわれる金剛福寺はその中に埋もれたように見える。足摺岬は海と森という対照的な景観が展開する所なのである。

四国最南端という位置と黒潮の影響で冬でも温暖、しかも降雨量も多いこの地は照葉樹林がよく発達し、その中に亜熱帯的な植生も見られるのだ。しかし原生的な自然林はわずかな面積しか残されていない。

岬周辺はその優れた景観によって戦後の経済復興、高度成長経済にともなって大衆的な観光地へと開発されていった。特に昭和四十五年の国鉄中村線と、足摺半島の脊梁を走る足摺スカイラインの開通が決定的な効果をもたらし、岬周辺にはホテルや民宿、みやげ物店、飲食店が次々に建設された。四十七年には足摺宇和海国立公園へと昇格、現在では高知県で最も人気のある観光地となった。

かつて寺の客殿、数軒の遍路宿ぐらいしかなかった観音信仰の霊地は、観光遊行の場にすっかり変容してしまったのである。もちろん今でも信仰の場であることには変わりはないが、お遍路さんのほとんどは巡拝バスや自家用車を利用し、昔ながらの歩いて回る人はあまりいない。春、秋の連休や夏休みの観光シーズンには駐車場や宿泊にも困るほどの混雑を呈している。

土佐をこよなく愛した歌人、吉井勇は足摺岬で次のように詠んでいる。

足摺の岬へかよふ遍路みち
　老いて寂しく往かむ日もがな

足摺のみ寺に通ふ遍路みち
　尽くるあたりの海を寂しむ

現在の足摺岬からはたしてこの歌の情景が浮かんでくるであろうか。おそらく今から半世紀ほど前はこの歌のとおりの景観がここにあったのだろう。足摺のイメージは半世紀の間にかくも変わってしまった。

その遍路道も車道によって寸断され、利用されなくなった今となってはほとんど消えてしまった。しかし、岬にはほんの数百メートルであるが遍路道の断片が残されている。そこを訪ねてみよう。

金剛福寺から北へ県道をとり、もっとも北の遊歩道の入口あたりから海とは反対方向の西の深い森の中へ入る道がある。これが旧遍路道の入口である。この奥が足摺岬周辺で最も自然が残されている。

ところで金剛福寺に至るかつての遍路道は窪川の岩本寺、宿毛の延光寺からそれぞれ一〇〇キロ、七〇キロもあり、歩き遍路にとっては最大の長丁場、修行の場であった。足摺半島のその道は東海岸の磯浜や段丘を通る大変な難路であったという。岬近くの寺の境内の深い森に入ってやっと平坦な道になったのである。幾多の遍路たちが寺の梵鐘の音や一丁毎に置かれた石仏に励まされ、「南無大師遍照金剛」を唱えながら最後の歩みに汗を流したのがこの道であろう。苦労の末たどり着いた岬の突端で、眼前に茫洋と展開する大洋を眺めた遍路たちが、こここそ遥か南海上にあるという補陀落（観世音菩薩の住む霊地）の入口だと考えても不思議でない。足摺岬とはそのような霊場だったのである。

遍路道は県道に平行してそれより一段高いところを通っている。コンクリート舗装の遊歩道と違ってこの道は足裏に心地よい。海岸から離れているにもかかわらず潮騒の音すら聞こえる。観光客の混雑からはなれて、様々な大木を眺めながら、この道を静かに歩けばかつての遍路の気持ちも幾分かは理解できるかもしれない。起伏はほとんどなく楽に歩けるが、夏はマムシが多いのでサンダル履きなどで立ち入ってはならない。

探鳥のための歩道が遍路道から分かれて西の方向へジグザグに斜面を登っている。やがて緩い尾根に出て、航空無線標識塔の敷地のフェンスにぶつかり、そこから南下し、沢に沿って東へ下るコースである。この沢沿いの道に大カヅラがある。おそらくシマサルナシ（ナシカヅラ）と思われる。沢の両岸の大木に絡みついて、谷の空間に太い蔓が垂れ下がっている。探鳥歩道というだけのことはあって、ここは野鳥の大変多い所だ。鳥の餌となる実のなる木が多く、森は絶好の住処を提供してくれるからだ。

ここの森はタブノキ、ホルトノキが優占する林で、ナギ、ヒメユズリハ、イスノキ、モッコク、バリバリノキなどの大木も混生している。林床にはホソバカナワラビ、カツモウイノデ、リュウビンタイ、オオイワヒトデなどのシダ類が繁茂し、亜熱帯的な様相を見せてくれる。タブノキの大木が茂る森は今となっては貴重な存在だ。

ここより北の、半島では高地にあたる佐田山シイ保護林もぜひ訪ねてもらいたい森だ。足摺スカイラインの影平山駐車場がこの保護林の入口である。岬に急ぐ車は駐車場に気づかずに通り過ぎてしまう。駐車場から少し岬側に下ったところに石造りの石鎚神社の鳥居があり、清水営林署の案内板がある。ここは白皇山（しらおさん）（標高四五〇メートル）の南斜面に広がる高知営林局管内で最も立派な照葉樹林で、学術参考保護林となっている。

佐田山保護林のスダジイの板根

鳥居をくぐるとすぐに暗い森になる。車の音も急に遠のき落ち着いた森のたたずまいとなる。スダジイ、アカガシ、ヤブツバキ、クスノキ、カゴノキ、ヤブニッケイなど照葉樹林のなじみの樹木が次々にあらわれる。

やがて歩道が竹林やスギ人工林を通るようになると、石垣が見えてくる。人工林の中に高さ五メートルほどの巨石がある。神石という。ここは金剛福寺の奥の院の跡なのだ。白皇山は古く室町時代の記録「蹉跎山縁起」に金剛福寺本尊の鎮護として熊野三所権現などとともに勧請されたとある。以来奥の院として白皇権現と称され、明治初年の廃仏毀釈運動のため廃寺になるまで存続した由緒ある寺の遺跡である。

白皇山頂へはここから照葉樹林の中をほぼ直登すればよい。右へ向かうとやがて「代表林分」の看板のある平坦なところに出る。ここはスダジイとアカガシを優占種とする保護林の中でも最も立派な所だ。ここで板根の発達したスダジイを見つけた。歩道は落葉が散り敷かれ歩きやすい。このあたりにスダジイの根に寄生するヤッコソウが出る。新聞やテレビには晩秋の風物詩としていつも登場している。

道標や枝に付けられたテープに導かれて沢をわたると元の鳥居からの道に出て、ちょうど保護林の中を一周したことになる。

森に関心のある人は足摺を訪ねたついでにこれらの森を歩いてほしい。今は観光地となってしまった足摺の原風景がこれらの森にあると思うのである。

（高知大学農学部助教授）

依光　裕編著
珍聞土佐物語　上・下巻　四六判　三九二頁　四〇八頁　定価各一、六〇〇円

鈴木文熹・井本正人・関根猪一郎著〈高知レポート6〉
協同組合と地域づくり　A5判　一三六頁　定価一、〇〇〇円

外崎光広著
土佐自由民権運動史　A5判　四二四頁　定価二、八〇〇円

外崎光広編
土佐自由民権資料集　A5判　三四四頁　定価三、〇九〇円

土居重俊監修　高知市文化振興事業団編
土佐弁　土佐日記　B6判　一三〇頁　定価一、〇〇〇円

岡林清水著
高知県文学散歩　四六判　二七八頁　定価一、八〇〇円

高知の文化を考える会編
高知の文化を考える　A5判　一八八頁　定価一、二〇〇円

高知市文化振興事業団編
わがまち百景　A5変　二二四頁　定価一、二〇〇円

筒井広道著
画帳の歳月　A5変　二五六頁　定価二、〇〇〇円

上森千秋著
流れと波の科学　A5判　二四〇頁　定価一、五〇〇円

土居重俊・浜田数義編
高知県方言辞典　A5判　七三六頁　定価六、一八〇円

高木啓夫著
土佐の芸能　B5変　三四六頁　定価四、九四四円

清水孝之著
中山高陽　A5判　三六二頁　定価三、九一四円

清遠幸男著〈高知レポート5〉
高知県の工業　A5判　一一二頁　定価一、〇〇〇円

今井嘉彦著〈高知レポート2〉
いかにすれば都市の河川はよみがえるか　A5判　一〇八頁　定価一、〇三〇円

土佐の野鳥 (一)

アカショウビン

山下　隆文

全長約二七・五センチ、カワセミ科のヒヨドリ大の鳥。山地の渓流で、カエル、小魚、昆虫などを捕らえて餌とする。日本で見られるカワセミ科の鳥は、この他に、カワセミ、ヤマセミがいるが、この二種が留鳥なのに比べ、アカショウビンだけが夏鳥として渡ってくる渡り鳥である。

アカショウビンとは名のごとく赤いショウビンのことで、ショウビンとはカワセミの古名であり赤いカワセミという意味がある。この鳥には多くの異名があり、昔から〝水恋鳥〟〝水乞鳥〟〝雨乞鳥〟〝水ひょろ〟など、水、雨に関係した名が多い。これは、今にも雨が降りそうなどんよりとした曇りの日とか、しとしとと雨が降る日に「キョロロロ…キョロロロロ…」と独特の鳴き声をよく耳にすることから名付けられたのだろう。

◇

私がこの鳥を初めて見たのは今から十年ほど前のことである。鳥好きの友人数人と椿原町の久保谷山へ鳥見に行った帰りのことだ。松葉川にそって車で窪川方向に帰路を急いでいたときである。前を走っていた友人の車が急に止まった。驚いて前方を見ると、数十メートル先の道路の上に突き出た横木に鮮やかな赤いものが見えた。一瞬何か分らなかったが、その〝鮮やかな赤〟が、アカショウビンのものであることを認めるのにそんなに時間はかからなかった。この時以来この〝鮮やかな赤〟の虜になってしまったのである。

◇

その〝赤〟との再会を夢見て、アカショウビン探しを始めて三年ほどたった春、鏡村の友人O氏から「鏡村の民家にできたシシバチ（スズメバチ）の巣に赤い鳥がぶつかりゆう」と情報が入った。「まさかこんな近くにいるなんて、アカショウビンではないだろう。しかし、赤い鳥というのはアカショウビン以外思いつかないな」などと考えながら鏡村に車を走らせた。

その場所に近づくにつれ疑いの気持ちは消え、「アカショウビンであってくれ」と祈るような願いに変わっていた。それから数十分後、O氏のいう家の前に着いた。しかし、アカショウビンらしき姿は見えない。遠くの方でシジュウカラが「ツツピーツツピー」と囀っている。車の上の桜の木ではヤマガラが、道路下の渓流ではカワセミの「チー」と鋭く直線的な声が聞こえてくる。

小鳥達の声を聞いている間に一時間が過ぎた。その時である。目に染みるような新緑の中から「キョロロロ…キョロロロロロ…」あの舌を転がしたような独特な声が聞こえてきた。正しくアカショウビンの声だ、私は「近くに来て姿を見せてくれ」と祈った。

祈りが通じたのか、それから数分後、三年前に見たあの〝鮮やかな赤〟が目の中に入ってきた。一目惚れした女性に再会したような、なんともいい表せない気持ちだ。私は、嬉しさのあまり思わず大きな声で「ヤッター！ヤッター！ヤッター！」と三回も叫んでしまった。近くに人がいれば「この人は一体何者だろう」と何か勘違いされそうな光景だったにちがいない。

◇

この感動的な出合いから約二カ月後、このシシバチの巣に営巣したアカショウビンの番いは、無事四羽の雛を育てた。

その後も毎年鏡村、土佐山村あたりでは声を聞くことはあるが姿を見ることは少ない。村の人の話でも、昔は随分と多くいたが、最近はあまり見ることがないという。

よく茂った広葉樹林を好み生息するため、自然林が少なくなったのが一つの原因なのかもしれない。いつまでもアカショウビンが生きていくことができる自然が残ってほしいと願うばかりである。

（写真家）

義兄へ

宇田佐由利

前略

今日は、電話をありがとうございました。本当に驚きました。スキー一級合格でも雲の上の人なのに、まだまだその上のコーチなんて、神様！　仏様！　です。

おめでとうございます。最初に聞いた時は、もうすごく驚いてしまって、声も言葉も出ませんでした。

本当に良かった、うれしいです。

今日のこの手紙、書こうか、止めようか、迷いました。でもお兄ちゃんなら私の気持ちをわかってくれると思い書くことにしました。

本当は昨年の秋に出すつもりだったのですが、「あっ」という間に半年も過ぎてしまいました。

結婚、出産そして、今や二児の母、生活のたのしさ、大変なこと、少しずつわかってきました。

そして、姉の偉大なこと、我慢強いことｅｔｃ……。

とても私には、真似出来ないことをつくづく感じました。若くして結婚したのに、本当にえらいと思います。自分の気持ちを押えても主人のことを思いやることが出来るのだから、だから、お兄ちゃんのペルー行き（海外青年協力隊）のことも賛成したのだと思います。後が、どんなに大変なことになるかはきっと分かっていたのだろうと思います。もし、今私が同じ立場なら、いくら主人に頼まれても絶対に反対します。

主人が家に居ないというのは、本当に大変です。

私なんて、五泊、雄造さんがいないだけでもうお手上げで、パニックでした。

いつでも姉は自分の気持ちよりも相手のことを大切に考えるのです。だから嫌なことでもＮＯとは、言えないのです。外見は強く、がんばりやさんに見えますが、内心はか弱く、傷付きやすいのです。

我慢強いから強く見えますが、心の中は、しっかり傷付いているのです。だから人前で涙を見せないのだと思います。

そういえば、お兄ちゃんがペルーへ出発した時の空港で、金網にしがみついて泣きくずれる姉の姿が、今でもはっきりと心の中に残っています。あんな姿はもう二度と見たくありません。

誰でも、好きでおばさんになるのではありません。主人や子どもが自分よりも大切だからつい自分のことが後まわしになってしまうのです。

いつでも、大好きな主人と一緒にいたいのです。でも、それを言うと、主人は好きなことが出来なくなってしまいます。それはとてもかわいそうなことだと思うから、自分の気持ちを押し殺して我慢しているのです。

きっとそうです。

鳥が巣を守るように必死になって、自分のこともかえり見ず、自分を捨ててがんばっているのです。

大切で、大好きな主人や子どもの為に……

それを苦とも思わずに……

わかってあげて下さい。もうわかっているかも知れないけれど。

スキーが一段落した今、もう一度思ってやって下さい。姉と恋愛していた頃のことを。

そして、もう一度恋愛してやって下さい。

こんなにいい妻はどこにもいませんよ!!

私の結婚式の日の野並さんのスピーチ覚えていますか？

「主婦業は完全であたり前、少しくらいがんばったからといって、ボーナスも何もありません。でもそんなものよりも、主人の一言が、どんなにうれしいものか……」本当にそうなのです。

「ありがとう」とか、私は一番聞きたいのは「好きだよ」とか、でも絶対言ってくれません。それでも言ってほしいなと思っています。雄造のバカヤロー!!

今は、私がお兄ちゃんにお願いします。どんな言葉でもいいのです。ステキなエッセンスをあたえてあげて下さい。

私は姉に大きな拍手を送りたいのです。でも私の拍手なんかよりも、お兄ちゃんの言葉が、どれだけ姉を幸せにするか、私にはわかります。

妹のわがままなお願いを聞いて下さい。

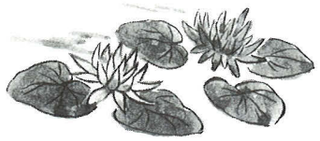
わがままな手紙でごめんなさい。

私の本心を書きました。

（字はもともときたないんだけど、手が家事でひび割れしていて、ますますきたなくて、ごめんなさい）

四月某日　　（西脇市在住）

情状証人



溝渕　悦子

弁護士が刑事事件の弁護人として活動する場合は、ほとんど情状の立証の場であると言っていい。犯行を否認して、有罪か無罪かを争い、裁判の途中で別の真犯人が判明し、被告人が晴れて無罪となるような、はなばなしい弁護人活動は、ドラマの中だけである。

情状の立証とは、犯行を認めたうえで、犯行の動機や原因、社会的背景、犯行後の行動や心境について、捜査官には見えなかった種々の事情を加えて、弁護人の立場から事件を構成し直し、検察官の立場から見た場合とは、また違った見方ができることや、被害弁償に努力したこと、いかに熱心な保護監督者がいるかなど、被告人の更生の可能性に有利な事情を家族や雇主その他の縁者を証人に立て、裁判官に訴えるのである。

「それで、これから娘さんと一緒に暮らしますか」

「いいえ。それは、できないです」

私は、自分の耳を疑った。裁判官も「おやっ」と書面に落としていた目を上げた。被告人は、二十一歳。母親と二人暮らしだったのが、中学卒業後就職し、工員寮に入っていたが会社も辞め、男友達の所を転々としながら、男友達とクレジットの詐欺や覚せい剤取締法違反の罪で起訴されている。前科はなく、これが初めてである。

裁判の一週間位前、打ち合わせをした時は、母親はアパートに一人暮らしで、食堂の店員として働いていると話していたので、当然この際住所不定の娘を引き取って、職に就かせ十分な監督をするという返事が戻ってくるとばかり私は、思い込んでいた。被告人は初犯だし、母親が詐欺の被害も弁償しているので、執行猶予の判決が下されるだろうが、それには、何としても落ち着き先が必要なのだ。

「アパートが狭いのですか」

私は、あわててバカな質問をした。

「いや、そういうわけでは、ありません」

なぜ一緒に暮らせないのか、ずばり正面から聞くことを躊躇させる雰囲気があった。この問いをしたら、どんな答えが返ってくるのか予測ができないまま、私は証人席の母親の後に腰かけている被告人の顔をうかがった。弁護人の慌てぶりや、裁判官の意外な表情とは裏腹に、被告人は何の動揺も浮かべていない。今の母親との問答が聞こえていないのかとさえ思えるほどだった。ただこの冷ややかともいえる態度はなぜだろうと思った瞬間、私は拘置所で彼女と話した時、彼女が母親には付き合っている男性がいるということをポツリと漏らしたのを思い出した。そして、その言い方から彼女とその男性とは感情的にうまくいっていないことがうかがえた。

「そうか、そうだったのか」

私は証人に正面から問うことにした。

「なぜいっしょに暮らせないのですか」

「――いいたくありません」

「あなたの他に身寄りはあるのですか」

「ありません」

「あなたが手助けできることはないですか」

「――私の近くにアパートを借りるようにして、生活の目処がつくまでちょくちょく見てやります」

私はどうにか型通りの身柄引受人らしき発言を引き出して質問を終わった。

この若い母親も、またこのように母親に育てられたのかもしれない。

警察での取り調べの際、ただなんとなく、男友達に誘われて、好奇心から覚せい剤をうつようになったと話していた被告人は、執行猶予の判決を得て自由の身になれたけれど、私はなぜかまた彼女が裁判の場に戻ってくるような気がしてならなかった。

（弁護士）

文化のひろば――⑨

トンボだけの博物館

―中村市立四万十トンボ自然館―

中村市の市街地をぬけ、赤い鉄橋で知られる「四万十川橋」を渡ると、すぐに右折の道がある。ここから約一キロメートル、新興住宅地を過ぎると東に向かって開けた細長い山あいに行きつく。この一帯が池田谷といって中村市トンボ自然公園、通称トンボ王国で知られるトンボ保護区だ。

池田谷全体は約五〇ヘクタール、将来的にはこの区域全域の公園化を目指しているが、現在のところこの一部三・三ヘクタールが自然公園となっている。

公園は入口に設置されたトンボ自然館と、ここから谷合いに向かって広がるトンボ池で構成され、ちょうどトンボの飛び交う池には一面にハナショウブやスイレンが咲きほこり、新緑を吹き通る風はトンボ王国にふさわしく、ここでは約七十種におよぶトンボの生息が確認されている。

自然館は木造平家造（一部二階）、五棟分棟型の建築で約六六〇平方メートル。建物の基礎の一部は池の中にあり、館のテラスの上からトンボや池の観察ができるように工夫されている。

なにより、木造の建物が山小屋風で周辺にマッチし、谷全体が自然館という印象を受ける。

館の展示の特徴はテーマを四つ、「知る」「学ぶ」「感じる」「遊ぶ」に分け、独立した四つの展示室を設けてトンボの生態や、人と自然の係わりなどを分かりやすく学習できる。

まず、玄関を入るとホワイトボードが目についた。

〝トンボ王国情報〟とマジック書きされた下には、「〇月〇日、今見られるもの」として、トンボ、チョウ、水生昆虫、魚類、野鳥、そして公園内で咲きそろった花の名前に至るまでが克明に示されている。

例えばトンボの項ではこうだ。

三十一種類の名前が書き出され、「チョウトンボ……羽化始まり」というように、観察メモが添えられていて楽しい。そしていくつかの大きなポリ容器が置かれ、水生植物が植えられた中にはヤゴやメダカが飼育され、手近でつぶさにトンボ池の様子がうかがい知れる。

「知る」をテーマの第一展示室は、トンボ王国の将来構想を立体模型を中心に示すとともに、自然環境とトンボの関係を大型写真パネルで解説している。

第二展示室は世界各国のトンボ標本を展示、同一種で地域によって斑紋などに違いが出る「地域変異」なども分かり興味深い。この他、〝縄張飛翔〟〝交尾〟〝産卵〟など生態の様子が分かる見事な写真パネルもある。

四万十トンボ自然館

そして第三展示室では100型スクリーンによる生態や自然環境との関係がビデオ映像によって紹介される。

「遊ぶ」をテーマの第四展示室は、〝水の中の生き物にもっと関心を〟と、日本産を中心とした多種類の淡水魚の飼育室で、四万十川の「アカメ」の遊泳などは、子供達が見ても飛び上りそうだ。

館をはじめ自然公園は、「社団法人トンボと自然を考える会」が市からその管理運営の委託を受けている。同法人では常務理事という立場にあるが、現場では肩書のないトンボ研究家の杉村光俊さんをはじめ、六名の若いスタッフが「楽しく、そして自然を守る」というテーマをよりどころに、がっちりスクラムを組んでいる。

同館が所有するトンボの標本も今やその数千二百種五千点にも及ぶ。一方、周辺の開発化の問題、そして運営のことなど、課題もまた山積している。

母に、オオシオカラトンボを虫カゴに入れてもらった思い出をもつ一人の少年の夢は、市の理解や全国の仲間の支えによって一九八八年に「トンボ自然公園」を、さらに一九九一年には「トンボ自然館」を実現させた。

この宝物を、そしてこの自然をいつまでも大切にしたいものである。

地域づくりへの明快な提言

『協同組合と地域づくり』

飯国　芳明

本書は、高知市における協同組合の発展と相互のネットワーク形成を成功させるための条件を明らかにすることを主題としている。構成は序章「いま、協同組合に求められる新たな意義と役割」、第一章「地方都市・高知市の農業と農協」、第二章「地域社会と生活協同組合―高知の生協」、第三章「高知市の金融と協同組合」、第四章「転換期の地域づくりと協同組合」の五章編成である。

協同組合の発展とネットワーク形成のための条件づけとして第一章では、十一種類にも達する高知市農協の販売形態の多くが農家の自主的な協同によって形成されていることに着目し、今後はこの協同を基盤にした農協と生協の提携が必要であるとされる。効率重視の農協管理論が多い中で、組合員の自主的な活動に視点を置いた貴重な提言として傾聴に値する。第二章では今後の生協発展のためにはまず店舗の展開が必要であるとされ、働く女性の増加に対応した生協の新たな段階の到来を感じさせる分析が展開されている。また、補節では現在の生協の飛躍の前史とも言える多難な歴史がよく整理されており、興味深い。

第三章では協同組合金融機関は組合員のニーズの把握ばかりでなく、村おこし等のために情報を地域に提供することが重要であるとされる。情報提供という従来とは逆の情報の流れは、今後の協同組合金融の歩むべき方向を示したものとして大いに注目される。最後に第四章ではトータルな地域づくりには情報の共有・交換による「下からの地域づくり」が不可欠であるとされる。協同組合のもつ情報公開の機能を充分に発揮した地域づくりが展望されている。

提言はいずれも詳細な実態分析に基づいているだけに、論理は明快かつ説得的である。協同組合の実務に携わる方だけでなく、広く一般の方にも一読をすすめたい。

（高知大学人文学部助教授）

高知出版情報

気軽に読める小冊子

このところ、岩波ブックレットや朝日ブックレットなど、ひとつのテーマを原稿用紙五〇枚から一五〇枚程度にまとめて気軽に読める小冊子がウケているが、県内出版でもそうした出版がいくつか目をひく。

少し日はたったが、草の家ブックレットNo１『前事不忘后事之師―前の事を忘れず後々の教訓とする―』は一九九一年夏、上海から無錫、南京へと高知歩兵四十四連隊の戦跡をたどり、日本軍の実態を聞きとり証言により調査し、今年で三回目。その時のガイド馬海燕さんは、現在高知大学で聴講生として近代日本史を学んでいる。まさに、中国と日本の心の結びつき実践の旅報告集。

『第一回大原富枝賞入賞作品集』、これは本山町に建設された大原富枝文学館の募集した、「ふるさと」をテーマとする随筆入選作三十五篇。

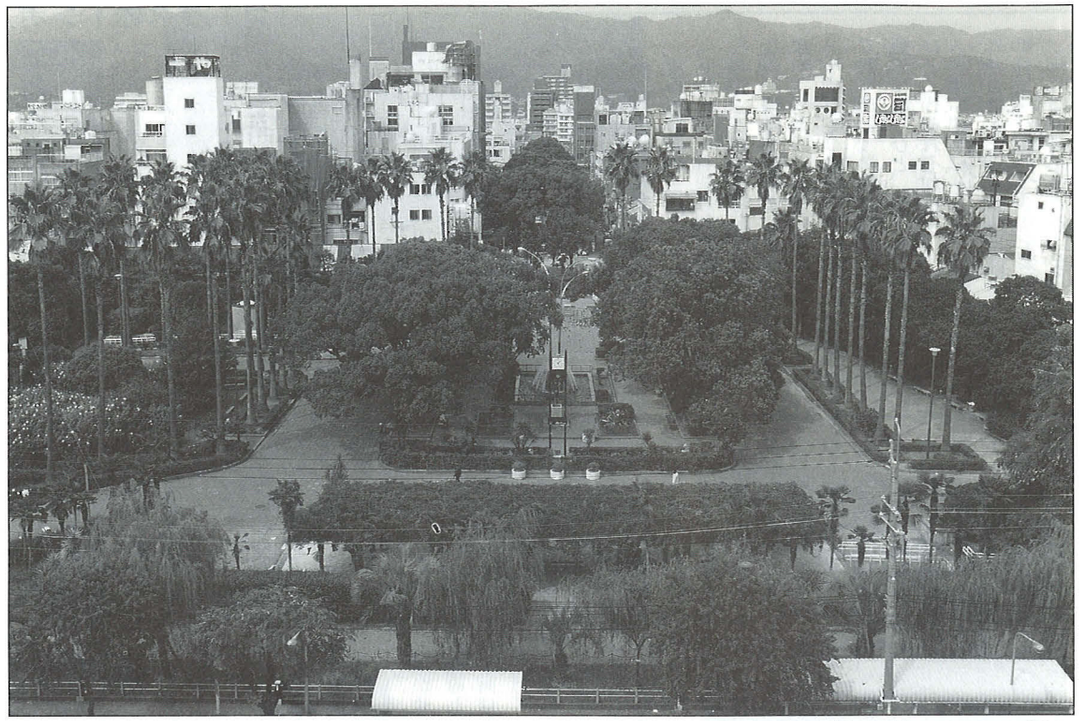
先日第二回審査結果の発表もあり、のびのびと作品を発表できる場の広がりがうれしい。

高知市立自由民権記念館友の会ブックレットNo１『中江兆民』（著者は岡林清水・猪野睦）、兆民忌実行委員会による『兆民研究』創刊号（亜細亜書房発行）は、百年忌を二〇〇一年にむかえる土佐の生んだ気骨ある民権家であり、偉大な思想家兆民に学び、さらにその実像に迫ろうとするもの。

また、『大学生が見たよさこい祭り』、『太平洋戦争と高知の女性展報告書』、『おかえりなさいミス高知』など民間パワーも見逃せない。

教材では、『高知のくらし』（高知市社会科教育研究会）、『たのしい教材』（高知市子ども科学図書館）など身近な新しい情報が楽しい。

行政サイドでは、高知県立歴史民俗資料館発行の『土佐歴史の遺品Ⅰ』や、くじらをめぐる文化史『鯨の郷・土佐』、自由民権記念館の『絵馬―土佐の歴史とくらし』、『初期議会と選挙大干渉』などの企画展示目録は、歴史への気軽な誘いとなっている。（妙）



第９回高知の映像コンテスト　特選

高知を撮る

中央公園

坂東　政雄

超高齢社会

風俗歳時記

自分の力で日常生活がままならなくなったお年寄りの世話を、誰がどこでどのような方法でするかは、いま大きな社会問題となっている。

寝たきりになっても、それまでと同じように、住み慣れた地域で家族と共に暮らしつづけたいと願うのは、自然の人情である。施設ケアでなく在宅ケアに比重をうつすという考え方に異論はない。しかし具体的にそれをどうするかとなると問題はそれほど簡単でない。

核家族化の進行、女性の就業の高まり、配偶者の高齢化など、家族介護への依存はすでに限界にきている。在宅ケアを即家族介護、とくに女性を介護の主役とみなし、公的部門はその補完だとする政府の考え方は、極めて問題が多いといわなくてはならない。老人病院よりも在宅介護の方がコストが安いとするコスト論を鎧の下に隠しながら、口頭禅よろしくお題目をとなえても、国民はその矛盾を見抜いている。

在宅介護というからには、公的サービスが介護の主軸になるシステムづくりが重要である。それにはまずホームヘルパーの大幅増員が先決で、北欧のように「いつでも、心要な時に」ヘルプサービスが受けられるようにすることが整備されなくてはならない。

看護婦や保健婦の確保はもちろん、圧倒的に足りない作業療法士、理学療法士の養成が急がれる。また寝たきりのお年寄りを起こしたり、住宅改造の助言などのヘルプサービスと、保健・医療、リハビリとの連携プレーがあってこそ、在宅介護を効率的にすすめることができる。そうした総合的な取り組みをしないで、ただ在宅介護の重要性だけを強調するのは、結果において対策を空洞化させてしまうことになる。

二十一世紀まであと八年、二〇一〇年ごろには、日本の高齢者人口は世界で初めて二十％を越すそうだ。いよいよ高齢化対策問題をみんなで考えるべきときにきた。（晋）

「コーラス赤トンボ」

命を育て

保坂　恵子

「命を生みだす母親は、命を守り平和をのぞみます」

こんな気持ちを大切にして、うたを歌いたい人が集まったのが「コーラス赤トンボ」です。

夏の空襲展の一環として行われている「平和コンサート」に参加したお母さんたちが、このまま解散するのはもったいない。続けて歌いましょうよと始まって五年。

月に一度、小さな子どもの手をつないで歌うひと、学校が週休二日制になって親子で歌うひと、小さい音符がみずらいひと、皆それぞれ様々。

春から夏にかけては、「赤とんぼ」以外のお母さんにも呼びかけ、「平和コンサート」の舞台づくりを楽しみます。

秋には、創立五周年になりますので、九月二十五日の午後「草の家」で催しものを計画しています。

冬には、お客様をお呼びしてクリスマスの集いを楽しみます。

いつでも小さな子どもたちが参加しています。

今、歌わなくても大きくなって、いろんな境遇にであった時、いつのまにか口ずさんでほしいものです。

願わくば親子でハモリたい私たちです。

連絡先　高知市越前町二丁目一〇―三一
　　新日本婦人の会高知市支部
電　話　〇八八八―二二―六五八八

「スケッチ画サークル」

生活に潤いを

山中　妙

スケッチ画サークルは、市民学校で池正孝先生のスケッチ画の指導を受けたＯＢ達が集まって、六十一年の九月に発足しました。

学習日は毎週水曜日の午後一時半より三時半までとし、中央公民館の第二講議室にて楽しい学習を続けて来ました。この間、絵に魅せられた仲間達と四季折々の季節の彩りを追ってスケッチ旅行に出かけ、共通の話題に花を咲かせています。絵を描くということは大変難しいと思われるでしょうが、スケッチ画は鉛筆で描き、水彩絵具で淡彩に仕上げていきますので、誰でも鉛筆と画用紙があれば気楽に描ける絵です。私達の教室は常時二十名位で、先生の巧みな話術とともに描くことの喜びを教えていただき時間の経つのも忘れてしまいます。でもちょっぴり厳しいところもあって、「確かなデッサンは確かな基礎から生まれる。この為にはいつも勉強を繰り返しすることである」と学習の度にいわれています。素敵な先生、そして楽しい友人達と共に一年間に描いた成果を作品展として年一回一般の方々にも見ていただき、これからも描くことによって生活に潤いを、心に豊かさを持ちたいと思っています。そして明るく楽しく幸せな絵を仲間と共に描き続けていきたいと願っています。

連絡先　南国市久礼田一一一八―一
電　話　〇八八八―六二―〇二〇七

生花「ふじの会」

自分らしさの表現を

三宅　和江

ふじの会は、昭和五十三年九月に発足して以来〝古流松藤会〟猪野理久先生の指導のもとで、楽しく生け花を習っているサークルです。

古流松藤会は、高知ではあまりなじみのない名前かもしれませんが、関東地方では、宮中でも生けられるなど、有名で伝統のある流派です。今習っているのは〝現代華〟という生け方で型にとらわれず、生ける人の個性や創作性、生活環境や素材に対する思い入れを重視して〝自分らしさ〟を存分に表現できる生け花です。また、希望すれば古来の生け花や立華など、いろいろな生け方が学べます。

普段は毎月二回木曜日に青年センター三階で練習していますが、青年センター主催の行事やセンター祭では、テーブルに四方花を生けたり個人作品の展示を、また、成人の日には会場入口に大作を生けたりと、いつもと違った意気込みでの生け花に取り組むことができます。また、親睦会を開いて、先生と会員相互のより深い交流も図っています。ふじの会では、現在会員数が八名と、少し淋しい練習風景です。

奥が深く、新しい自分を発見することもできる生け花を、気転に楽しく一緒に始めませんか。

連絡先　高知市桟橋通二丁目一―五〇
　　高知市青年センター内
電　話　〇八八八―三一―四九三一

「淡墨会」

墨色に魅せられて

深瀬　綾子

黒一色で七色の表現が出来る水墨画の魅力にひかれ、けんめいに絵筆を走らせているグループ、それが私達の所属する淡墨会です。

市民学校の水墨画教室を修了したものが、もっと深く勉強したいと、西本信雄先生に指導を依頼し、六十一年七月淡墨会が生まれました。

稽古日は毎週木曜日の午前十時より十二時まで、中央公民館で行っています。現在、会員は高知市内に住む四十代～七十代までの女性で、約十名。

墨絵は描き直しができず、常に成か否です。それゆえ一線一描に全心全力を傾け、精神を集中して描かなければならない精神的な業でもあります。技を磨く為には厳しさもありますが、教室はいつも和やかなムードに包まれ、週に一度の出会いを楽しみつつ、墨と水の調合によって、墨色の微妙な変化・筆により線や面の表現で描く人の胸中にあるものをあらわし、墨でかくことにより、とどまるところのない世界を描いています。

これからも四季折々の花や鳥、野菜など、身近なものを題材に、素晴らしい先生や友達との出会いを大切にし、感謝しながら人生の形を変えた表現として、筆を取りたいと願っています。墨絵に興味のある方、お好きな方、一緒に描きませんか。

連絡先　高知市福井町四三七―七
電　話　〇八八八―二四―〇六三一

散歩の途中で

高知市でも地盤沈下が問題となり、この動きを調べるための測定点が、下知下水処理場附近を中心として市内に二十七地点設けられている。

うち六地点は建設省管轄で、残り二十一地点が高知市管轄の一級水準点。ここ南久保の卸商センター会館前の水準点も沈下の度合が大きいものの一つ。

測定開始は昭和四十八年、現在五年毎に調査は続けられており、今年はちょうど測定年にあたる。はたしてどんな数値が出るか。

風伯

県民気質

普通江戸っ子というとき、富豪や大店の主人は、江戸生まれの江戸育ちでも江戸っ子とは言わない。江戸っ子らしい江戸っ子というのは、下町の商店主や棟割長屋にいる職人たち庶民である。

江戸はいうまでもなく武家の町で、なにかにつけて武士が威張っていたが、江戸の庶民文化はこの人達が支えた文化である。

土佐でイゴッソーというときも、構えて暮らすオエラ方や大家の主人はそうは言わない。イゴッソーの代表はやはり庶民である。

イゴッソーというのは、単なるヘンクツではなく、もっと人間的にスケールが大きく、明朗闊達で、正義に向かって直進し、利害得失や毀誉褒貶を考えずに、自分の信念を貫く堅固人とされてきた。

そのイゴッソーが、このころ大分格落ちしているらしい。全体に男性が女性化してきていることと関係があるかもしれないが、若い人達にこうした土着的性格が歓迎されなくなっていることは確かである。つまり土佐の男たちも、近代化され、もの分かりがよくなって、野性と覇気を失ったというのだ。

また、どちらかというと最近頓にハチキンの方が有名になって、イゴッソーの存在感を相対的に希薄にしていることも否めない。

このところハチキンパワーは全盛だが、土佐の気質を最後まで残すのはやはり女性たちだろうか。

（華）

飛天コンサート高知公演'93

～能楽の夕べ～

7月16日(金)　自由民権記念館アトリウム
高知市桟橋通4－14－3

7月17日(土)　要法寺庭園(雨天の場合は室内)
高知市筆山町8－5

開　演■午後7時

入　場　料■大人2、000円　中高生800円

昨年につづき、今年も「飛天」のコンサートを開催します。能囃子の枠にとどまらず、直接心に響く音を伝える「飛天」の演奏を、ぜひお楽しみください。

出　演　大倉流大鼓方　大倉正之助
幸清流小鼓方　柳原冨司忠
森田流笛方　内潟慶三

プログラム
●三番叟(さんばそう)　●急の舞　●構成曲
●波頭(なみがしら)　●神楽　●羯鼓(かっこ)

主　催■㈶高知市文化振興事業団＋飛天を聴く会
チケット発売■高新プレイガイド、チケットセゾン
高知大丸、高知市文化振興事業団
問い合わせ■㈶高知市文化振興事業団
(電話予約)　TEL　0888－73－4365

依光　裕編著

珍聞土佐物語　上巻　下巻

五十人の語り部たち

定価各1,600円

五十人の古老たちが語る、地域にまつわる伝説や小咄。数々の土佐咄に遠い昔の「ふるさと」が蘇る。

上巻

下巻

好評発売中

シリーズ「**現代を読む**」(8月)

私たちの身のまわりにある様々なテーマを分かりやすく、かつ徹底的に解説。

◎書くことは感じること
～作文にみる友達・学校・家庭～
8月17日(火)　越智康夫氏(高知小学校教諭)

◎日仏の漫画と絵本に学ぶことばの世界
8月24日(火)　岡本克人氏(高知大学助教授)

■会　場　市民フロア(デンテツターミナルビル5階・85-2393／駐車場はありません)
■時　間　上記曜日の午後6時30分～8時30分
■定　員　各回40人(定員になり次第締切)
■受講料　各回400円(資料代を含む)
■申し込み先　電話で高知市文化振興事業団まで

財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町5丁目2番3号　TEL(0888)73－4365
郵便振替 徳島 8-14869